隔離することと結びつくこと

—ヤミ族の4門主屋の空間構成に関する研究—

ISOLATING AND CONNECTING

—A study on the composition of space in the Yami's four-entranced main house—

足立 崇*

Takashi ADACHI

The Yami people generally make effort to reconstruct and expand the main house during their lifetime. The type and name of main house vary with number of entrance. This report attempts to elucidate the composition of space and its meaning through analysis of each types of the main house. We can see that the main post "tomok" and the hearth for flying fish are isolated from daily life space with expansion of the main house, and it is related to two orders of space, called "teylaod(sea direction) - teyrala(mountain direction)" and "sarey(male side) - sekez(female side)".

Keywords : Taiwan, Yami, Dwell, Composition of space, Threshold, Depth

台湾, ヤミ族, 住まう, 空間構成, 敷居, 奥行き

1. 序

台湾本島南端から東へ 74km のところに蘭嶼という周囲 38.4km の島がある。ここには台湾原住民のヤミ族とよばれる人々が生活している。ヤミ族の家屋宅地は基本的に主屋 vahay、副屋 makarang、涼台 tagakal、前庭 aorod によって構成されている(図1)。主屋 vahay は斜面を造成してつくられたくぼみに建てられた木造の建物で、前庭 aorod からは屋根面しか見えない。ここは就寝や食事など基本的な生活の場所で、くぼみに建てられているため暴風雨にも耐えられる。副屋 makarang は vahay 前の tozantehed とほぼ同レベルに建てられる木造高床式の建物で、出入口は海側と山側にそれぞれ設けられている。ここはかつて漁具の製作や、接客、子供達の就寝などに使われていた。また、老親やそれに相当する被扶養者、もしくは子供夫婦の新婚時の生活の場所にもなった。涼台 tagakal は前庭 aorod に建てられた木造高床式の小さな建物で、四方に開放されているためここで涼みながら海や集落の状況を眺めることができ、夏の接客や寝・食の場所としても使われる。主屋 vahay の棟木は海方向－山方向に直交するように、副屋 makarang、涼台 tagakal の棟木は海方向－山方向と平行になるようにそれぞれ建てられる。また前庭 aorod に直径約 30cm の丸石が敷き詰められており、その間を芝生が覆っている。その一角には高さ約 60cm の背もたれ石 pananadengan が数

個と魚を干す干竿 rarawan が立てられている。

このように、一つの家屋宅地には vahay、makarang、tagakal という異なるタイプの建物が石垣によって複雑に構成された敷地に配置されている。本稿では、そうした家屋の中で最も重視される主屋 vahay に着目する。主屋 vahay は一般的に小規模のものから大規模のものへ建て替えていき、出入口の数によって形式や名称が異なる。ヤミ族は結婚後に夫の居住地近くに住むのを原則とし、最初は利用

図1. 家屋宅地図

* 大阪産業大学工学部環境デザイン学科 助手・工修

Research Assist., Dept. of Environmental Design, Faculty of Engineering, Osaka Sangyo University, M. Eng.

可能な土地で、valag という 1 門または 2 門の vahay を建てる（夫方の父母の makarang に住むこともある）。その後、家族構成の変化や資力に応じて nijjingjing とよばれる 3 門 vahay や cinangbadan とよばれる 4 門 vahay に建て替えていく。既往研究では、4 門 vahay の平面形態の分析はなされているが、1 門 vahay から 4 門 vahay へと展開していく過程での空間構成の変化については分析されてこなかった。本稿ではこうしたことを踏まえ、主に 3 門 vahay から 4 門 vahay への展開の空間論的意味について解明しようとするものである。それは、先取りして言えば 1・2 門 vahay のような臨時的住まいに比べ、3 門 vahay は飛魚の炉や象徴的柱などの備わった完成された住まいであるのに、なぜさらに 4 門 vahay を建てようとするのかを空間論的に問い、その糸口を探りたいからである。ここではまず各形式の vahay がどのようなものかを概観し、その共通点と差異を見ていくなかで 4 門 vahay の空間構成の意味を明らかにしたい。

尚、本研究は 1994 年 7 月 19 日～30 日、1995 年 8 月 4 日～9 月 1 日、1996 年 7 月 30 日～8 月 23 日、1997 年 11 月 8 日～12 月 9 日、1999 年 8 月 2 日～8 月 31 日、2000 年 4 月 30 日～5 月 6 日の期間に伝統的集落の残る Ivalino 村を中心に行った調査に基づくものであり、ヤミ語の音韻表記は土田（1992）¹⁾ に準拠している。

2. 空間秩序

（1）海方向 teylaod—山方向 teyrala

まず、家屋の空間構成を規定する海方向—山方向と sarey 側—sekez 側という二つの空間秩序について説明したい。ヤミ族にとって海方向 teylaod、山方向 teyrala という方向は東西南北といった方位より重要といわれており、家屋の棟向きや寝・食における身体方向もこの方向によって規定されている。海は様々な魚介類を、山は薪や材木をもたらす場所としていずれも恵みをもたらす場所である。一方、ヤミ族の洪水神話では、海は「住まい」や人の命を奪い無化する場所として、山はそうした海から逃れ生き延びる最後の依り処であり不動性を有した場所として語られている。また、海の彼方には死霊 anito の島や天界があると信じられており、山は怪物のいる場所として恐れられ、祖先の誕生した場所とも信じられている。このように海と山とは重層的で両義的な意味を有しており、これらの意味は海方向と山方向という二つの方向と結びついている。ヤミ族が「住まう」のはこれら二方向のはざまである²⁾。

（2）sarey側—sekez側

海方向—山方向に直交する空間秩序として sarey 側—sekez 側がある。sarey 側—sekez 側は日没側—日出側に対応するといわれるが、東西南北の方位が完全に一致する訳ではない。Ivalino 村、Iranomilek 村、Iraralay 村では海に面して左側が sarey 側、右側が sekez 側であり、島の反対側の Imorod 村、Iratay 村、Yayu 村ではそれが逆になる。つまり、sarey 側—sekez 側は実際の日没側—日出側とは方位的にずれがあり、両者の対応は理念的なものといえる。まず海方向—山方向が優先的に家屋の棟向きを規定し、それにしたがって sarey 側—sekez 側の向きが決まっているのである。また、原則的に sarey 側は男性の側、sekez 側は女性の側に対応するとされる。これは通常それほど厳密なものではないが、飛魚漁期にはこの規定が厳しくなる。さらに、死霊 anito に対して水芋・豚肉を奉獻する manaod 儀礼において、それらの供物を屋外の sarey 側に置くことな

どから、sarey 側は死霊 anito と結びつく側ともいわれる³⁾。このほか、sarey 側—sekez 側が、それぞれ死—生、聖—俗、優—劣、老—幼、暗—明に対応するといった論考もある⁴⁾。

3. 各形式の vahay

（1）1 門 vahay

次に各形式の vahay がどのようなものか見ていく。1 門 vahay は valag とよばれる、出入口が一つの家屋である（図 2）。床は板張りで、屋根は茅で葺かれ、四周の壁は石積み壁と茅壁で構成されている。また、出入口には片引き戸がついている。1 門 vahay は、出産のための産屋や重病人の治療の場所として建てるものである。また独身男性が結婚するまでの間、父母の家屋宅地に居住のため建てることもある。産屋として建てる場合、夫が自分の家屋宅地内の任意な場所に建てる。また、産屋ができあがると妊婦はすぐ新しい炊事道具をもって移り住み、分娩までここに起居する。このとき夫は主屋のほうに別居する⁵⁾。ただし、出産は 3 門 vahay や 4 門 vahay でも可能であり、出産に際し産屋がかならず建てられるとは限らない。1 門 vahay は規模が小さいため敷地は約 1 m しか掘り下げられない。入口の奥には dovahay とよばれる場所がある。dovahay には炉が一つ sekez 側に設けられており、ここで芋や肉、魚などの調理を行う（図 2 は Imorod 村の例であるため sarey 側と sekez 側の向きが逆になっている）。飛魚やシイラなど飛魚漁期しかとれない回遊魚をここで調理することはできない。ちなみに、1 門 vahay は現在建てられることがなく実際に見ることはできない。

（2）2 門 vahay

2 門 vahay もまた valag とよばれる、出入口が二つの家屋である（図 3）。2 門 vahay は、新婚夫婦が居住のため夫方の父母の家屋宅地に建てたり、産屋として建てるものである。また、親の家屋宅地を継承した既婚の兄弟の宅地に、未婚の兄弟が居住のため建てることもある⁶⁾。新婚夫婦はこの 2 門 vahay を建てて生活を始めるか、夫方の父母の makarang に移り住んで生活を始めることが多かった。床は板張りで、屋根は茅で葺かれ、四周の壁は石積み壁と茅壁で構成されている。また出入口には片引き戸がついている⁷⁾。1 門 vahay より規模が大きいので、ある程度の広さの敷地を必要とし、敷地も約 1.5 m 掘り下げられる。出入口手前には sesdepan という縁側のような場所があり、出入口の奥に dovahay という場所がある。dovahay には炉が sekez 側に設けられており、ここで芋や肉、魚などの調理を行う。1 門 vahay や 2 門 vahay では、基本的に飛魚やシイラを調理する炉がないので、父母の住んでいる 3 門 vahay や 4 門 vahay で調理する。しかし、父母がいない場合 2 門 vahay でも飛魚を調理できる。実際、Ivalino 村に残る 2 門 vahay の一つには飛魚を調理する炉が設けられている。ただし、それは 3 門 vahay や 4 門 vahay のように sarey 側に設けられるのではなく、sekez 側に日常的な食物の炉といっしょに設けられている。ちなみに 2000 年調査の段階では Ivalino 村に 2 門 vahay は 2 棟しかなく、そのうち 1 棟は廃屋となっている。

（3）3 門 vahay

3 門 vahay は nijjingjing⁸⁾ とよばれる、出入口が三つの家屋である（図 4）。伝統的なものは床が板張りとし間、屋根が茅で葺かれ、四周の壁が石積み壁と板壁、茅壁とで構成されている⁹⁾。出入

図2. 1門vahay (産屋) 平面図・断面図
(千々岩助太郎『台湾高砂族の住家』1960より)

図3. 2門vahay平面図・断面図
(方鏗雄『蘭嶼雅美族傳統住居建築之研究』1984を参照して作図)

図4. 3門vahay平面図・断面図 (筆者作図)

図5. 4門vahay平面図・断面図 (筆者作図)

口手前に sesdepan という縁側のような場所があり、片引き戸のついた出入口の奥へ一段あがったところに dovahay という場所がありその中央には棟木を支える親柱 tomok が立てられて、tomok の前後で床が板間と土間に分かれている。土間とはとくに rarangan とよばれる¹⁰⁾。また、それぞれの出入口に対応する場所にも名称が与えられている。3門 vahay の場合、それは sarey、mavak、sekez という場所に分かれている。sarey、sekez は sarey 側－sekez 側にそれぞれ対応している。mavak は「中心・中間」という意味である。ここは sarey 側と sekez 側との境界にあたり、親柱 tomok の位置する重要な場所である。

親柱 tomok は3門 vahay と4門 vahay に立てられる撥形をした板柱で、前面には山羊の角 ozon no kagling が彫刻され、「vahay の霊魂」pahad no vahay ともいわれている。tomok は基本的に長男が継承する柱で（父親の意志により変更可能）、最も重視される部材である。また、現実にはそのようになっていない例もあるが、遺産相続などで家屋を分解し部材を分配するとき tomok だけは敷地を離れることがなく、古くなっても焼却処分にされず、朽ち果てるまで敷地内に放置されるという報告もある¹¹⁾。

炉 rarapoyan は二カ所に設けられており、それぞれ用途が異なる。dovahay の sarey に設けられる炉は飛魚やシイラなどの回遊魚を調理する炉で、dovahay の sekez に設けられる炉はそれ以外の魚介類や芋、豚、山羊、鶏などを調理する炉である。一般的に dovahay の sarey の炉はその使用に男性が責任を負い、dovahay の sekez の炉は女性が責任を負う。また、dovahay の後壁には、tomok に対応する位置に開口部が一つ設けられている。開口部には、はめ込み式の戸がついており、普段開けられることはない。

(4) 4門vahay

4門 vahay は cinangbadan とよばれる、出入口が四つの家屋である（図5）。cinangbadan という名称は4門 vahay の腰壁として使われる部材 tangabad からきている¹²⁾。伝統的な4門 vahay は床が板張り土間で、屋根が茅で葺かれ、四周の壁が石積み壁と板壁、茅壁とで構成されている。出入口手前に sesdepan という縁側のような場所があり、片引き戸のついた出入口から奥へ一段あがって dospanid、さらに奥の出入口から一段あがって dovahay があり、階段状に構成されている。dovahay には親柱 tomok が2本立てられており、tomok の前後で板間と土間に分かれている。また、それぞれの出入口に対応する場所には sarey、mavak、ospanid、sekez という名称が与えられている。

4門 vahay の2本の親柱 tomok は大きさや名称が異なる。dovahay の mavak に位置する大きい tomok は rakorako a tomok と呼ばれ、儀礼をとめない製作されるのに対し、dovahay の ospanid と sekez の間に位置する小さい tomok は aliyalikey a tomok と呼ばれ、儀礼をとめなわず他の部材と同様に製作される。rakorako は「大きい」を意味し、aliyalikey は「小さい」を意味する。以後便宜上それぞれの tomok を大 tomok、小 tomok とよぶこととする。

4門 vahay の炉は二カ所に設けられており、それぞれ用途が異なる。dovahay の sarey に設けられる炉は飛魚やシイラなど回遊魚を調理する炉で、dospanid の sekez に設けられる炉はそれ以外の魚介類や芋、豚、山羊、鶏などを調理する炉である。これらは3門 vahay の二つの炉と用途は同じであるが、設置場所が異なっている。また、

dovahay の後壁には、2本の tomok に対応する位置に開口部が二つ設けられている。3門 vahay と同様、はめ込み式の戸が開口部についており、普段開けられることはない。

4. 各形式のvahayの空間構成にみる共通点と差異

ここでは各形式の vahay の共通点と差異を主に空間構成からみていきたい。各形式の vahay を空間名称や部材、儀礼の有無などから比較しまとめたのが下表である。

	1門vahay	2門vahay	3門vahay	4門vahay
海方向－山方向	○	○	○	○
sarey側－sekez側	○	○	○	○
地面掘下げ	○	○	○	○
sekezの炉	○	○	○	○
dovahay	○	○	○	○
前庭aorod	×	○	○	○
涼台tagakal	×	○	○	○
落成礼	×	×	○	○
sareyの炉	×	×	○	○
親柱tomok	×	×	○	○
土間rarangan	×	×	○	○
mavak	×	×	○	○
dovahay後方門口	×	×	○	○
副屋makarang	×	×	○	○
dospanid	×	×	×	○
ospanid	×	×	×	○
腰壁tangbad	×	×	×	○
小tomok	×	×	×	○

表1. 各形式のvahayの比較

まず1門 vahay から4門 vahay の共通点としてあげられるのは、いずれの vahay も海方向－山方向、sarey 側－sekez 側によって規定されるということである。また地面を掘り下げて建てるということや sekez に炉が設けられるということ、dovahay という場所があることが共通点としてあげられる。共通点のなかで注目されるのは、dovahay という場所の形成である。dovahay という名称は場所の接頭辞 do と vahay からなっている。こうした vahay と関わる名称のものはほかにもいくつかある。たとえば asa ka vahay は同居集団（一つの敷地内に居住する集団）を指す名称である。asa ka は「一つの～」を意味する非人数詞であるから、asa ka vahay は「一つの vahay」ということになる。また mivahay は「住む」という意味の動詞である（mi は動詞活用接辞）。このように vahay には makarang や tagakal とは異なる、「住まい」としての特別な意味があると考えられる。そして、そうした vahay に各形式をとおして必ず形成される dovahay という場所は、vahay においてとくに重要な場所であると予想される。ここではこうしたことを踏まえつつ各形式の vahay の比較をしていき、vahay の空間構成が変容していく意味を明らかにしたい。

1門 vahay と2門 vahay の共通点は、建造後に落成礼が執りおこなわれないことや、sarey の炉がないこと、親柱 tomok がないこと、

土間 *rarangan* がないこと、*dovahay* 後方の開口部がないこと、そして副屋 *makarang* が付属しないことなどである。これらはそのまま、1・2門 *vahay* と3・4門 *vahay* の間の差異でもある。一方、1門 *vahay* と2門 *vahay* の差異は、1門 *vahay* に妊婦や独身男性など単身の者しか居住できないのに対し、2門 *vahay* には夫婦で居住可能ということ。また、1門 *vahay* には前庭 *aorod* や涼台 *tagakal* が付属しないのに対し、2門 *vahay* には付属するということも差異としてあげられる¹³⁾。これらはその規模の大小が大きく関わっているが、1門 *vahay* が2門 *vahay* にくらべてあくまで臨時的な家屋であることのあらわれともいえる。一方、3門 *vahay* と4門 *vahay* の差異は、4門 *vahay* に3門 *vahay* にはない *dospanid* と *ospanid* という新たな場所が形成されることや腰壁 *tangbad*、小 *tomok* という新たな部材が加えられることである。

これら各形式の *vahay* の共通点と差異を見ていくなかで浮かびあがってくるのは1・2門 *vahay* と3・4門 *vahay* の間に大きな差異があるということである。それは1・2門 *vahay* 建造後に落成礼が行われないのに対し、3・4門 *vahay* では行われるということに明確に現れている。*vahay* 建造に際し行う落成礼 *mivaray* はヤミ族の建築儀礼のなかでもとくに重要なものである。落成礼は客に対して大量の水芋や豚肉を分配しなければならないため、それ相応の資力のあるものしか行うことができず、3年以上も前から準備しなければならないといわれる。ヤミ族が財産の多くをなげうってまで落成礼を行う理由については多くの論者が論じているが、そのなかで大方の見解になっているのは、落成礼を行うことが階層性のないヤミ族社会にあって威信と発言力を高めることになり、威信競争のなかで重要な意味を持つということである。ここではこうした落成礼を行うことの社会的意味を問題にするのではなく、落成礼の行われる *vahay* と行われない *vahay* とでその空間構成にどのような差異があるかに注目したい。1・2門 *vahay* と3・4門 *vahay* の空間構成における差異としてあげられたのは、1・2門 *vahay* に *sarey* の炉、親柱 *tomok*、土間 *rarangan*、*mavak* という場所、*dovahay* 後方の開口部が設けられないのに対し、3・4門 *vahay* にはそれらが設けられるということであった。まず、そのうちの一つ *sarey* の炉であるが、これは飛魚を調理する炉である。先述したように1・2門 *vahay* でも飛魚を調理するが、それは *sekez* の炉においてであり、それも限られた場合にのみ調理されるのであった。そもそも飛魚は海の彼方の天界から毎年春になるとやってくるとされており、天界からの恵みと考えられている。*sarey* に設けられる飛魚の炉の意味については以前に論じたことがあるが¹⁴⁾、それに従えば、*sarey* の炉の有無は海の彼方の天界と結びつく場所の有無ともいえる。一方、親柱 *tomok* は先述したように「*vahay* の靈魂」*pahad no vahay* ともよばれるわけであるから、その重要性は察することができよう。また、土間 *rarangan* はそうした *tomok* の背後の最も内奥の場所であり、*sarey* の炉が設けられる場所として特別な意味を持つと考えられる。*mavak* は訳すと「中心・中間」という意味の場所であり、こども *tomok* の立てられる場所として特別な意味を持っている。また、古老によると、*dovahay* 後壁の開口部は、けんかをした相手が *vahay* に押し掛けてきたとき、そこから外に逃げ出すためにあったという。また、暴風雨のとき、1～3門 *vahay* に住む人たちが生活道具をもって親戚の4門 *vahay* に一時的に避難するため、そこから4門 *vahay*

の中に入ったという。つまり、*dovahay* 後壁の開口部は窓ではなく、出入口であったといえる。そしてそれは日常的に使われたのではなく、災害など緊急の時に使われたのである。ただし *dovahay* 後方の開口部はそれだけの意味で設けられているのではなさそうである。たとえば次のような伝説が *Iranomilek* 村で語られている。

祖父は天の人たちに尋ねた「彼らは子供のために泣いておりかわいそうです。どうか蛇に食われた子供を助けられませんか。」天の人たちは答えた「もし我々にできるならば助けよう。できなければ、助けられないだろう。もし5日たっても我々が彼を助けることができなければ、6日目に後ろの開口部を開けに行きなさい。子供はそこにいるだろう。」6日目の朝、彼らは後ろの開口部のところに行き開けてみると、そこに子供がいた。彼らはお互いに顔を見合わせた。人が本当に生き返ったのだ。「おまえの名前は何か」と彼は尋ねた。「私はあなたの子供です。天の人たちが生き返らせてくれ、ここに降ろしてくれたのです。」子供が本当に帰ってきた¹⁵⁾。

ここでは *dovahay* 後方の開口部がたんなる緊急時の出入口としてではなく、天界と結びつく場所として語られているのである。以上、1・2門 *vahay* と3・4門 *vahay* の空間構成における差異を見ていくと、これらがすべて *dovahay* という場所に関わることからであることが分かる。1・2門 *vahay* では *dovahay* が日常的な生活の場所としてあり、そこに象徴的意味は見られないのに対し、3・4門 *vahay* では *dovahay* が *tomok* という象徴的な柱や天界と結びつく諸場所によって分節され、象徴的意味が付与され聖性を帯びるのである。つまり、1門 *vahay* から4門 *vahay* をとおして *dovahay* という場所は共通に形成されるものの、1・2門 *vahay* と3・4門 *vahay* の間でその空間的意味が大きく変わるのである。そして、そうした *dovahay* の聖性の有無が落成礼の有無とも連関していると考えられるのである。1・2門 *vahay* に継承部材がないのに対し、3・4門 *vahay* にはあるのも、たんに部材の再利用ということではなく、「住まい」として継承すべき何かが3・4門 *vahay* にあることのあらわれといえるであろう。それでは、その3門 *vahay* から4門 *vahay* へ展開していく過程で空間構成はどのように変化するのだろうか。すでに3門 *vahay* と4門 *vahay* の共通点に関しては1・2門 *vahay* との差異をとおして明らかにしてきたので、次に3門 *vahay* と4門 *vahay* の差異を見ていき、4門 *vahay* への展開の意味を空間構成から明らかにしたい。

5. 3門 *vahay* と4門 *vahay* の差異にみる空間構成の意味

(1) *dospanid* の形成

3門 *vahay* と4門 *vahay* の差異でまずあげられるのは、内部空間の分節の差異であろう。たとえば各出入口に対応する場所が、3門 *vahay* では *sarey*、*mavak*、*sekez* の三つの場所に分けられるのに対し、4門 *vahay* では *sarey*、*mavak*、*ospanid*、*sekez* の四つの場所に分けられる。また、出入口に面して奥行方向に対しては、3門 *vahay* で *sesdepan*、*dovahay* と二つの場所に分けられるのに対し、4門 *vahay* では *sesdepan*、*dospanid*、*dovahay* という三つの場所に分けられる。注目されるのは、3門 *vahay* から4門 *vahay* になるとき、出入口に対応する場所においても奥行方向につづく場所においてもともに *dospanid* (*do* は場所を示す格) と *ospanid* というほぼ同名の場所が

形成されることで、内部空間の分節に差異が生じることである。以下では dospanid と ospanid という二つの直交する場所（図6）の形成に焦点を当て、3門 vahay から4門 vahay への展開の空間論的意味を考察していきたい。まず dospanid の形成について見ていく。

4門 vahay における dospanid の形成で注目されるのは、dospanid と dovahay との敷居の位置に tangbad という高さ 30～40cm の腰壁が設けられることである。この tangbad は、4門 vahay 建造に際し親柱 tomok や棟木 sapawan とほぼ同様の手順で儀礼をとまない製作される部材で、相続や分配においても tomok について重視される部材である。その重要性は cinangbadan という4門 vahay の名称が tangbad からきていることや、落成礼の歌会において tangabad がよくとりあげてうたわれることにも窺える。それではこの tangbad が設けられることで内部空間はどのように変化するのであろうか。まず言えるのは dospanid と dovahay の間に大きな段差ができ、両者が床高の違いによって明確に分離されるということである¹⁶⁾。こうした分離は tangabad の上に設けられる出入口のついた壁によって明確にあらわされている。

ところで、tangbad は中国語で「踏脚板」と訳されることがある。これは dospanid で寝るとき、仰向けになって頭を海方向に向け、足の裏を tangbad につけることからきている。ここで足の裏を tangbad につけると述べたが、dospanid の床板は水平でなく、5/100～15/100 程度の勾配をつけて海側を高くしてあり、tangbad も同程度の勾配で後方に傾いているので、tangbad を踏むといったほうが適切かもしれない。以前に4門 vahay における就寝の仕方について考察したが¹⁷⁾、そこでは家長が dospanid の mavak において頭を海方向に向け tangbad を踏みつつ寝ることで、海—山方向に「vahay の靈魂」tomok と結びつくことが明らかとなった。家長はそうに mavak において「vahay の靈魂」tomok と結びつくことで安心して眠ることができるのである。tangbad は一方で dospanid と dovahay との間に大きな段差をつくり両者を分離するが、他方で dospanid に居る家長と dovahay の tomok を海—山方向に結びつける媒介にもなっているのである。tangbad が設けられることの意味を明らかにするには、こうした他の部材との関係も考えなければならないようである。

図6. 4門vahay平面模式図

先述したように tangabad とほぼ同じ手順で儀礼をとまない製作される部材は親柱 tomok と棟木 sapawan である。親柱 tomok は何度も触れているように象徴的価値の高い柱であるが、もう一方の棟木 sapawan とはどのような部材であろうか。棟木 sapawan に関しては子供を授けるとされる iparagaragao という超人間的存在者との関わりが報告されている¹⁸⁾。それによると iparagaragao とは死霊 anito や天の人 tao do to とは異なる不可視の者で、常に蘭嶼を巡っており、男女が結婚するのを見ると vahay の棟木に停まって子供を授けるといふ。また、棟木 sapawan に関しては死霊 anito との関わりも見られる。たとえば、主屋落成礼では屋根上の棟木 sarey 側に死霊 anito に対する供物（水芋などを入れた皿）が置かれるし、葬送儀礼では死者の家族の一人が屋根の棟木のところに立ち、死霊の島があるという海の彼方に向かって告別の言葉を述べる。棟木 sapawan はそのように家人の誕生や死と関連して超越的な外部と結びつく部材といえるのである。sapawan がそのような部材であるのは、「vahay の靈魂」tomok がその下部を支え、結びついているということが深く関係しているであろう。棟木 sapawan は棟持柱 tomok が立てられて初めて成り立つ部材であり、sapawan と tomok は切り離し得ない関係にある。そうしてみると、tangbad と tomok と sapawan のみがほぼ同様の手順で儀礼をとまない製作される部材であるということもなすける。tangbad と tomok と sapawan はそれぞれ独立した部材というよりも、堅密に結びついた部材といえるのである。三つの部材の関係をあえて図式的に示すとすれば、tangabad は就寝時に足の裏をつけて tomok と結びつく部材であることから明らかに足元の大地と関わる部材であり、tomok はそうした大地に垂直に立てられた部材である。そして sapawan は tomok によって上方に持ち上げられ天空へと開かれた部材といえよう。tangbad、tomok、sapawan という重要な部材の結びつきは、大地の上に建てられ天空に向かって開かれた「住まい」の図式を端的に示しているともいえるのである。

そもそも3門 vahay の dovahay は就寝や食事の場所となるなど、日常生活の場所としてあった。それゆえ3門 vahay では tomok や sapawan が dovahay にありながら日常に関わる部材としてあった。それに対し、4門 vahay では dospanid の形成によって主たる日常生活が dospanid でなされるようになり、dovahay はより内奥に隔離され日常性が失われるようになった。こうした空間的隔離をするのが dospanid と dovahay の間に大きな段差をつくる tangabad であり、その上の出入口のついた壁¹⁹⁾であった。こうして4門 vahay では tomok や sapawan が一段あがった内奥の場所 dovahay に隠されるようになったわけであるが、逆に隔離され隠されることでその聖性が高められることにもなったのである。3門 vahay では tomok や sapawan の製作時に儀礼がなされないのに対し、4門 vahay では tangbad、tomok、sapawan の製作時にほぼ同様の儀礼がなされるのも、内奥に隔離された tomok や sapawan の聖性を高めるためであり、同時にそうした部材と dospanid において唯一結びつく tangabad の象徴的意味をより明確にするためであったと考えられる。このように tangabad とは、大きな段差をつくり出すことによって tomok や sapawan を内奥に隔離し、日常生活の場所から分離する部材であるとともに、tomok や sapawan とその根底で象徴的に結びつく部材でもあったのである。tangabad はそうした隔離しつつ結びつけるとい

両義性を有した部材といえる。

こうした dovahay の隔離に関わって、もう一つ注目されるのは二つの炉の位置変化である。3 門 vahay の炉は dovahay の sarey と sekez に設けられているが、4 門 vahay の炉は dovahay の sarey と dospanid の sekez に設けられるようになる。先述したように飛魚やシイラなどを調理する炉は、一般的に男性がその使用に責任を負う。天界からの恵みである飛魚は神聖であり、漁や食事にあたって多くの儀式や禁忌が関係する。そうした飛魚の調理される炉は、飛魚漁期に重視され、土間においてもっとも穢れてはならない場所となる。それ故、sarey の炉は dovahay というもっとも内奥の場所に設けられるのである。一方、sekez の炉は飛魚やシイラ以外の魚介類や芋、豚、山羊、鶏などを調理する炉で、一般的に女性がその使用に責任を負う。3 門 vahay ではそうした二つの炉がともに dovahay に設けられている。3 門 vahay における dovahay はやはり聖なる場所と日常的なる場所が未分化な場所といえるのである。それに対し、4 門 vahay では sarey の炉（飛魚の炉）は dovahay に設けられ、sekez の炉（日常的食物の炉）は dospanid に設けられ、両者は明確に分離される。やはりここでも dovahay がより内奥の聖性を帯びた場所となり、日常生活は手前の dospanid でなされるようになるのである。

（2）ospanidの形成

次に 4 門 vahay における ospanid の形成について見てみる。ospanid の形成でまず気づくのは、ospanid に小 tomok が立てられることで、3 門 vahay で 1 本しかなかった tomok が 4 門 vahay で 2 本になるということである。ただ、先述したように小 tomok は大 tomok のように儀礼をともしない製作されることはなく、大 tomok ほど重視される柱ではない。1936 年から 10 年間にわたって台湾原住民の集落を調査した千々岩助太郎の 4 門 vahay 実測図（全 5 例）²⁰⁾ をみると、tomok は mavak に 1 本立つのみである。そして、tomok に関する記述で「後室の略中央に 1 本（稀に 2 本のものもある）」²¹⁾ とあるように、もともと 4 門 vahay の ospanid に小 tomok が立っているものは一般的でなかったと考えられる。そうであるとすれば、そもそも ospanid の形成にはどのような意味があったのであろうか。

ospanid は Ivalino 村や Iranomilek 村、Iraralay 村での名称で、島の反対側の Imorod 村、Iratay 村、Yayu 村では dobosongaran とよばれる。ospanid の名称の意味についてはこれまで明らかにされてこなかった²²⁾。ヤミ語で panid は「羽根」を意味するが、ospanid という名称は羽根 panid からきているのであろうか。ヤミ族にとって鶏や緑鳩の羽根 panid は霊力が宿るものといわれており、新造船の進水式るとき船足が速くなるように船首と船尾を鶏の羽根で飾ったり、飛魚漁期に大船の各自の座席に鶏の羽根を置き安全を祈願したりする。また、manirin という石を落とす漁が不漁のときは緑鳩の羽根を使い釣り針に祈りを込め豊漁を祈願するし、穢れを取り除く祓い儀礼 mipaspas でも鶏の羽根が用いられる²³⁾。さらに、家屋や大船の落成礼のとき、女性が水芋を収穫するが、そのとき用いられる儀礼用の掘棒が鶏の羽根で飾られることもある。ospanid がそうした霊力を有する羽根 panid からきているとすれば、ospanid という場所にもなんらかの隠された意味があると考えられることもできよう²⁴⁾。ospanid のもう一つの呼び名 dobosongaran が場所を示す格 do、「無い」を意味する bo (yabo)、目的格 so、「名前」を意味する ngaran

から構成され、「名無し」という意味であるのも、そこが意味の隠された場所であることを暗示していると考えられることもできる。

ospanid に関しもう一ついえるのは、ospanid が sekez 側に属しているということである。sekez 側は女性の側と対応しているので、4 門 vahay では 3 門 vahay にくらべ女性の側が出入口一つ分増えることになる。これによって、sarey と sekez との間隔が広くあき、sarey の炉と sekez の炉が距離的に分離する。しかし、それはあくまで距離的分離で、dospanid の形成で見たような tangabad やその上の壁による分離にくらべればゆるやかな分離である。また、就寝や食事の仕方などをみると、ospanid は女性（妻）の定位する場所である。さらに、ospanid は vahay における妊婦の使用する出入口とされ、出産のとき定位する場所でもある。このとき妊婦は dovahay の大 tomok と小 tomok の間、すなわち ospanid の床上に定位し、頭を海方向に足を山方向に向けて分娩する。出産後、妊婦と赤ん坊はしばらく dovahay や dospanid の ospanid で安静に生活し、後日 sesdepan のほうに出ることができる。ospanid がそのように妊娠時や出産時、産後に女性の定位する場所であるのも、そこが厄払いや安全祈願などで用いられる羽根 panid と関わる場所であるからと考えることもできる。ospanid と羽根 panid との関係はあくまで仮説にすぎないが、ospanid が女性にとって非常に重要な場所であることは確かである。mavak が男性（家長）にとって「中心」の場所であるとすれば、ospanid は女性（妻）にとっての「中心」の場所ともいえるのである。ただし、そうであっても vahay においてはあくまで mavak が「中心」の場所であり、ospanid は mavak ほど明確に意味があらわれないのである。そして、そうしたことが ospanid や「名無し」を意味する dobosongaran といった名称にもあらわれているのではなかろうか。4 門 vahay で tomok がもともと mavak に 1 本立てられるのみで、dovahay 後方の開口部も基本的にそれに対応して一つであり、ospanid には目に見えるかたちでその意味をあらわすものがなかったのは、そこが何もないというかたちで意味を隠していた場所であったためとも考えられるのである。近年、mavak に大 tomok、ospanid に小 tomok が立てられ、dovahay 後方の開口部がそれらに対応するように二つ設けられるようになったのは、ospanid の隠れた意味が目に見えるかたちで表されるようになったことを意味しており、それは ospanid 自体の意味が失われつつあることを示しているとも考えられるのである。

6. 結

各形式の vahay を比較しその共通点と差異を見ていくなかで、3 門 vahay から 4 門 vahay への展開における空間構成の変化とその意味を明らかにしてきた。そこでまず明らかになったのは、1・2 門 vahay の dovahay が日常生活の場所としてあり、そこに象徴的意味を有するものが見られないのに対し、3・4 門 vahay の dovahay は sarey の炉や親柱 tomok、土間 rarangan、dovahay 後方の開口部など象徴的意味を有するものによって構成され聖性を帯びているということである。そうした差異がひいては 1・2 門 vahay の建造後に落成礼が行われなかったのに対し、3・4 門 vahay では落成礼が行われるということと連関していると考えられたのである。また、3 門 vahay と 4 門 vahay の空間構成における差異として注目されたのは、4 門 vahay で形成される dospanid と ospanid という二つの直交する場所

であった。

dospanid と ospanid の形成を比較してみると、dospanid による空間分節がより明確であるのに対し、ospanid による空間分節がそれほど明確でないことが分かる。これは dospanid の形成が vahay の奥行方向への展開であるのに対し、ospanid の形成が出入口に面した左右の幅の拡がりであるということとも関係していよう。ここでの奥行方向への展開は海方向－山方向というヤミ族の祖先誕生やその軌跡と関わるものである。そして、左右の幅の拡がりには sarey 側－sekez 側すなわち男性側と女性側という性別と関わるものである。もちろん sarey 側－sekez 側も日没側－日出側と理念的に対応しており、聖－俗、暗－明といった区分で語られることもあるが、海方向－山方向のような祖先誕生の軌跡といった神話・伝説を背景とした意味はなく、海方向－山方向とは性格や意味次元のことなるものといえる。やはり、棟向きの決定にも見られるように奥行方向と重なる海方向－山方向の方が、sarey 側－sekez 側に比して優越しているのである。そのため 3 門 vahay から 4 門 vahay へ展開するにあたって、より大きな変化をもたらすのは dospanid の形成であった。そこで明らかとなったのは 3 門 vahay の dovahay が日常性を有した場所であると同時に sarey の炉や tomok などから構成される聖性を帯びた場所であり、聖－俗の未分化な両義的場所であるということ。そしてそれに対し、4 門 vahay の dovahay は日常性が薄れ、腰壁 tangbad によって内奥に隔離され、より聖性を帯びた場所になるということである。さらに就寝の時、3 門 vahay では家長が dovahay で足の裏を tomok に直接つけて寝るのに対し、4 門 vahay では家長が dospanid で足の裏を tangbad につけて間接的に tomok と結びついて寝るように、dovahay が隔離された分、海方向－山方向に沿った奥行きのある象徴的結びつきが構成されることが明らかとなった。

以上をまとめれば、1 門 vahay から 4 門 vahay までの展開は dovahay という場所の日常性が薄れ、聖性を帯びていく過程であったといえる。3 門 vahay から 4 門 vahay への展開からは、そうした dovahay を内奥に隔離しつつ海方向－山方向に沿った象徴的結びつきを保持していく、奥行きのある空間構成が読みとれるのである。

謝辞

台湾ヤミ族文化フォーラム第4回研究会において、発表の機会を与えられ、会員の皆様に本稿に結びつく貴重な御助言を賜ったことに感謝いたします。

註

- 1) 土田滋：「ヤミ語」、『言語学大事典』（亀井孝・河野六郎・千野栄一編）、第4巻、1992
- 2) ヤミ族の神話や海－山方向については拙稿で場所論的考察を試みている。足立崇・西垣安比古・前川道郎：「台湾ヤミ族における神話と『住まう』こと」、『日本建築学会計画系論文集』、514、pp.257-262、1998
- 3) 乾尚彦：「バシイック諸族の研究その2 蘭嶼ヤミ族における居住空間の展開」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、pp.13-14、1986、pp.13 参照
- 4) 關華山：「雅美族的生活質素環境與宗教理念」、『中央研究院民族學研究所集刊』、67、pp.143-175、1989。
方經雄：『蘭嶼雅美族傳統住居建築之研究』、私立淡江大学建築研究所碩士論文、163pp.、1984。
陳玉美：「夫妻、家屋與聚落 蘭嶼雅美族的空間觀念」、『空間、力與社會』、黃應貴 主編、中央研究院民族學研究所、pp.133-166、1995。
- 5) 鹿野忠雄：「紅頭嶼ヤミ族の出産に関する風習」、『南方土俗』、5(35)、pp.78-89、1939、pp.82 参照

- 6) 蔣斌：「蘭嶼雅美族家屋宅地的成長、遷移與繼承」、『中央研究院民族學研究所集刊』、58、pp.83-117、1984、pp.84 参照
- 7) 図3では片開き戸になっているが、これは近年の傾向である。
- 8) Tsuchida et al.(1987)によれば蘭嶼の南に位置するバタン島のイバサイ（バスコ）では「壁」のことを rinjing や jinjing といい、バブヤン島では「壁」のことを jinjin という。3 門 vahay の名称 nijinging も、もともとこうした言葉からきている可能性も考えられる。
土田滋・山田幸宏・森口恒一：「List of Selected Words of Batanic Languages」,Department of Linguistics, The University of Tokyo、198pp.、1987
- 9) 現在、vahay や makarang、tagakal で屋根が茅葺きのものはほとんど見ることができない。屋根はトタンにアスファルトフェルトをかぶせたものになっている。
- 10) 蘭嶼の南に位置するイトバヤット島では「炙る」を rarangen という（Tsuchida et al./1987）。これは土間 rarangen がもともと炉と密接に関わった場所であったことを示唆しているとも考えられる。実際、土間 rarangen の sarey には炉が設けられている。
- 11) 乾尚彦：「地域小集団による建築生産の研究－蘭嶼の居住空間－」、『住宅建築研究所報』、11、pp.337-351、1985b、pp.344 参照
- 12) 董瑛女：「野銀村工作房落成禮歌會（中）」、『民族學研究所資料集編』、4、pp.1-111、1991、pp.30 参照
- 13) ただし、ときに 1 門 vahay に tagakal が付属することもある。2 門 vahay に aorod が明確に付属しないこともあると報告もある。
方經雄：『蘭嶼雅美族傳統住居建築之研究』、私立淡江大学建築研究所碩士論文、163pp.、1984、pp.30 参照
- 14) 足立崇・西垣安比古：「中心と境界に住まうこと－ヤミ族の住まいの場所論的研究－」、『日本建築学会計画系論文集』、539、pp.297-304、2001
- 15) Benedek Dezso：A COMPARATIVE STUDY OF THE BASHIIC CULTURES OF IRLA, IVATAN AND ITBAYAT, a Dissertation in Comparative Literature, The Pennsylvania State University、1911pp.、1987、pp.212-214 参照
- 16) 4 門 vahay には tangbad のほかに cipican という sesdepan と dospanid の間（3 門 vahay でいえば sesdepan と dovahay の間）の腰壁があるが、cipican の高さは tangbad の半分ほどで tangbad ほど大きな段差をつくらない。
- 17) 前掲書 14)
- 18) 前掲書 5) pp.78 参照
- 19) この壁の出入口には sesdepan と dospanid の間の出入口のような片引き戸は設けられていない。つまり dospanid と dovahay の間は、完全に分離されるのではなく、開口された出入口をとおしてなかば一体化されつつ、分離されているのである。
- 20) 千々岩助太郎：「ヤミ族の建築」、『台灣高砂族住家の研究 第三報』、台灣建築會誌、pp.1-67、1941、
- 21) 同上 pp.11 参照
- 22) Benedek (1987) は ospanid（原文では espanid）を「second」と訳しているが、調査ではそうした意味が確認されなかった。
前掲書 15)
- 23) 三富正隆：「台湾ヤミ（Yami）族における空間認識と世界観の変容」、『地理学評論』、66A-8、pp.439-459、1993、pp.450 参照
- 24) ospanid に羽根 panid が関係しているとすれば、dospanid にも羽根 panid が関係しているであろう。dospanid は腰壁 tangbad に代表されるように dovahay との境界をなす場所である。dospanid のそうした境界としての意味が厄払いや安全祈願などに関わる羽根 panid と関係していると推測することもできる。

(2002年5月7日原稿受理、2002年11月20日採用決定)